

絲綢之路

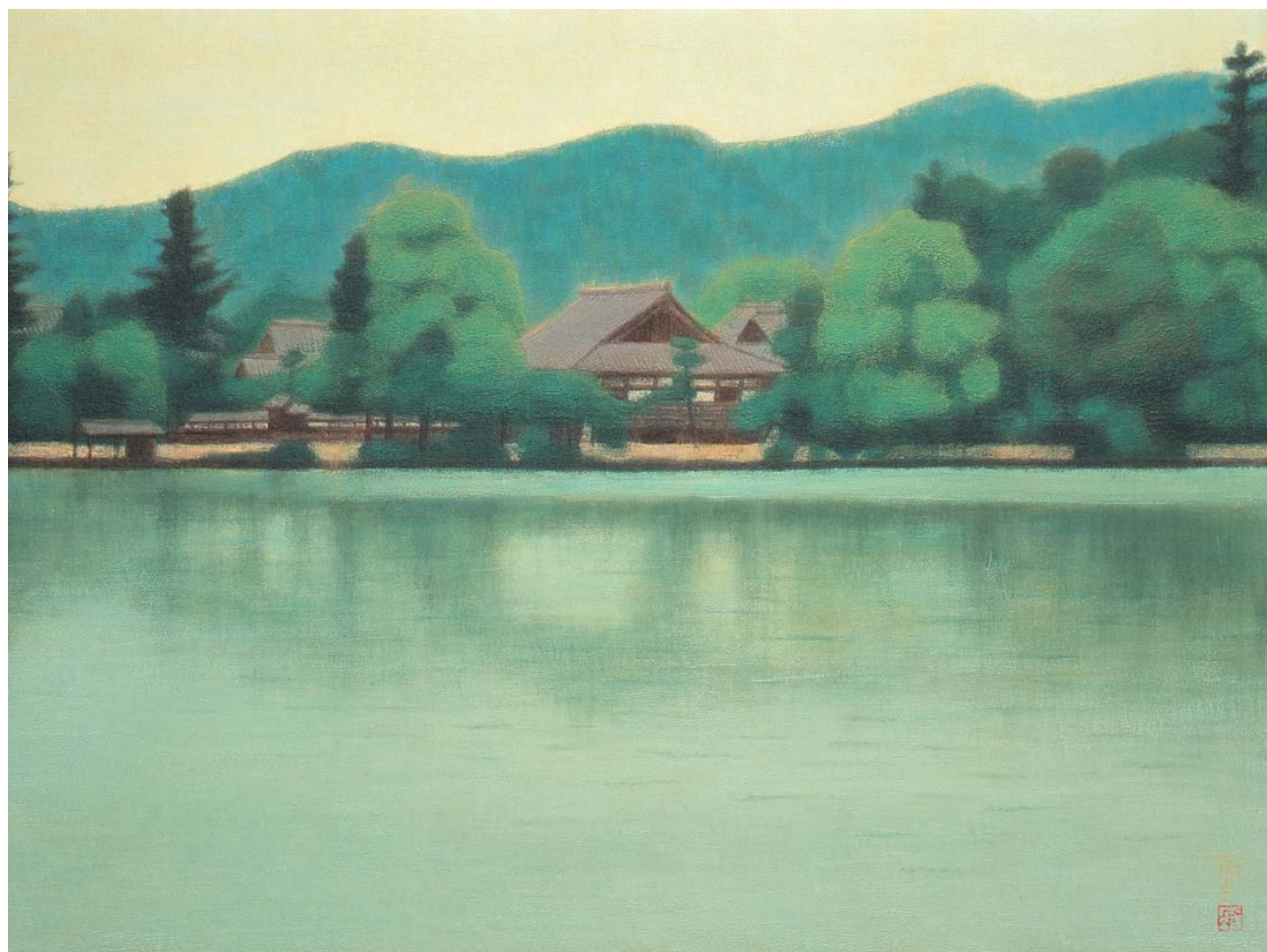
シルクロード

S I L K R O A D

2012-夏

No.69

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。



緑映大覚寺 2004年



【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

公益財団法人

文化財保護・芸術研究助成財団

FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH

ジェンネ旧市街 (マリ共和国)



ユネスコ世界遺産(文化遺産)シリーズ

©UNESCO

十四〜十六世紀ごろ、サハラ南部にあるニジェール川の交易ルートに栄えた商業都市。旧市街は、現存する市街地と古代都市遺跡からなる。ヤシ材を骨組みとして、練り土で築いた奇抜なデザインのもスクを中心に広がり、さまざまな店が軒を連ねている。マリ帝国とソンガイ帝国時代には、北アフリカのイスラム商人が多数往来した町であった。

(一九八八年に文化遺産として登録)

公益社団法人

日本ユネスコ協会連盟

緑の風の中で想うこと

四月の末に所用があつて、久しぶりに故郷の佐渡島へ行ってきました。途中、上越新幹線の車窓から見る越後平野は、山笑う季節にはほど遠いものがあり、今年の冬の長さを実感した次第です。

私もでは、毎年七月末に新潟県妙高市で開催される「妙高夏の芸術学校」を共催という形でお手伝いしております。その事務局の方たちが財団に打ち合わせに来られました。三月末のことです。異口同音におっしゃるには、今年の雪の深さです。このままでは苗代づくりも遅れるし、田植えも例年通りとはゆかないのでは、と心配されていました。

異常な気象状態が続くなか、五月六日には希にみる大竜巻が発生。つくば市を中心に茨城、栃木の市町村に大被害をもたらしました。

いかに科学・技術が進歩しても、私たち人類は大自然の前では赤児同然です。時には優しく、時には厳しくせまってくる自然の力といかに折合をつけて生きるかは、人類にとって永遠の課題かもしれません。

しかし、自然界は時に素晴らしい贈り物をしてくれます。去る五月二十一日、東京では江戸時代の天保十年(一八三〇)以来、一七三年ぶりという金環日食を見ることができました。当

日は雲が多く、青空の中に練り広げられる壮大な宇宙ショー、といった趣きにはいささか欠けましたが、それでも天体力学の確かさを十分に堪能できるものがありました。

さて、私どもが進める事業の中で最も大きいものは助成事業です。本年度からはこれに東日本大震災による被災文化財の復旧支援事業が加わります。本誌が皆さまのお手元に届く頃には、決定通知等が関係者に知らされていると共に報道機関にも公表されていることと思います。

四月の雨は五月の若葉を育て、そして季節は初夏へと移ります。梅雨入りする前のこの期間は一年でも最も過ごしやすい快適な季節でもあります。上野の杜の緑を見遣りながら、私は、ふと思いました。

現在の経済情勢のもとでは、国の予算制においても文化、芸術の分野はとかく十分にゆきわたらない傾向にあります。国の文化行政を司る文化庁は、こう述べています。

「文化芸術は、人々に大きな喜びや感動、心の豊かさや安らぎをもたらす心の資産であり、国境を越えて様々な価値観を共有する基盤となるもの。他国に誇る自国の文化芸術を持つことは、何物にも代え難い心のよりどころとなる。また、文化芸術の振興は持続的な経済発展や国



理事長
宮田 亮平
(みやた りょうへい)

際協力のパラダイスの基盤となるものであり、我が国の国力を高めるものとして文化芸術を位置付けておく必要……」(文化庁月報二〇一〇・七)

誠にその言やよし、だと思います。しかし、現実は大変厳しいものがあります。

私どもの財団は、個人、法人の皆さま方から寄せられた浄財を元に運営いたしておりますが、日本経済の低調を反映して、ここ数年は樂觀を許されない運営を強いられております。

東日本大震災の被災文化財の救済に関しては、文化庁、日本サムスン社、ワールドモニュメント財団、SOCといった諸機関の御協力のもと、二億七千万円強の浄財が寄せられました。本当に感謝の極みです。前記の如く、その支援活動は本年度より開始です。

問題はこれからです。私どものこの活動は今後五年間継続する予定です。こうした活動は世の中が落ちつくにつれ、そのエネルギーが減少しがちです。そうした事態は極力回避すべく努力いたします覚悟でございます。

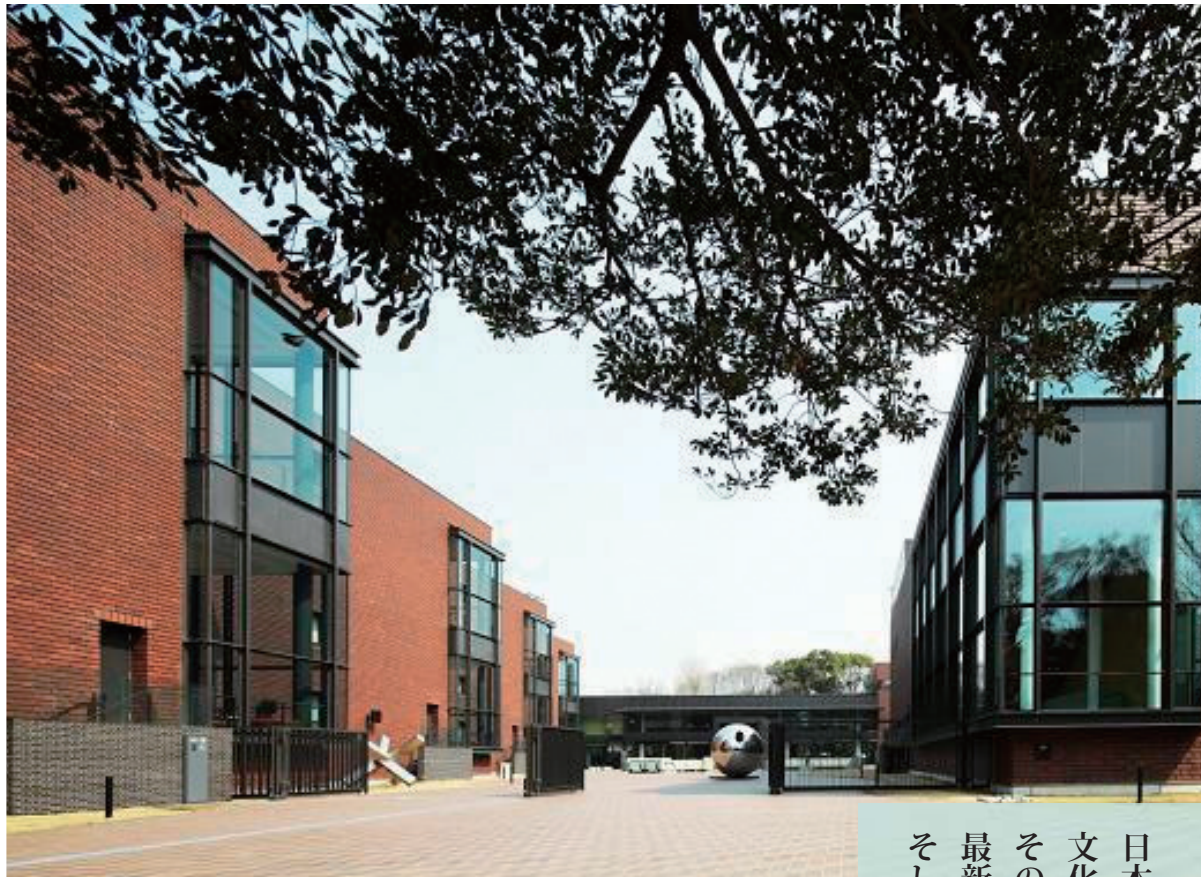
いささか愚痴めいたことを申し述べましたが、皆さま方におかれましては、当財団をとり囲む環境を御理解のうえ、今後ともよろしく御協力賜りますようお願い申し上げます。

新生・東京都美術館と上野公園



東京都美術館・館長
眞室 佳武
(まむろ よしたけ)

日本を代表する美術館、博物館等の文化施設が集う上野公園。その中で「院展」などで知られる東京都美術館が、最新の施設を整え、このたびリニューアルオープンしました。そして改装工事を終えた上野公園についても御紹介しましょう。



リニューアルなった美術館の正面入口

上野公園誕生秘話

新緑の薫る上野公園は、桜の咲き誇る頃とは違って、静かに公園を訪れる人を魅了して止まない。豊かな緑が公園らしい憩いの雰囲気をつくり、心を癒してくれる。幕末から明治初年の戦火のあと、樹木の緑だけは早々と回復したに違いない。だからこそ、自然に恵まれ、史跡の多いこの地が公園に選ばれ、文化的な催しや施設に相応しい地と考えられたのであろう。今は美術館、博物館などが建ち、「文化の森」と呼ばれている上野公園、その一隅に赤褐色のタイル壁の東京都美術館は建っている。

東京都美術館は、二年余の大規模改修工事を終えて、四月一日にリニューアルオープンした。昭和五十年（一九七五）に建て替えられた建物は、前川國男の設計で、周りの自然と調和した

モダンイズム建築である。このたび躯体を残して、内部を全面的に改修した。東日本大震災の影響などで、二カ月遅れの竣工となった。この改修工事を機に東京都美術館が再出発するにあたり、改めて上野公園との歴史的関係などを振り返りながら、新生・東京都美術館の今後の活動等について触れてみたい。

上野の山は、十七世紀の江戸時代に歴史の舞台に登場する。徳川将軍の信任の厚かった天海僧正（一五三六―一六四三）によって、徳川家の菩提寺寛永寺が寛永二年（一六二五）に創建された。上野台地は、江戸城の鬼門に当たることから、京都御所の北東の鬼門を守るために琵琶湖の西、比叡山に延暦寺が開山したのに倣って、西の比叡山に対して東叡山寛永寺と呼ばれた。また琵琶湖に見立てて元来、天然の池であった不忍池を現在の姿のように変えた。

時代は下って、慶応四年（一八六八）、

上野の山は官軍と幕府軍による戦いの場となり、寛永寺本坊をはじめ殆どの建物が焼失し、一帯は焼け野原と化した。

維新後、西洋医学所や病院の建設計画が進められていたが、上野の山を視察したオランダ人医師ボードワン博士（一八二一―八五）は、豊かな自然が失われるのを惜しんで、将来のためにも公園として残すように政府に進言。その結果、明治六年（一八七三）に公園に指定され、明治九年（一八七六）に正式に開園した。ボードワン博士が上野公園の生みの親と言われる所以である。

博士の偉大な功績を称えて、上野恩賜公園開設百年を記念して昭和四十八年（一九七三）に博士の肖像ブロンズ像がオランダ大使館から東京都に寄贈された。像には立派な顎鬚があり、医学博士らしい風貌と思われてきたが、近年、銅像は博士の弟の肖像であることが判明。平成十八年（二〇〇六）に、顎鬚のないボードワン博士の胸像に作り換えられた。

東京都美術館誕生物語

上野公園は、明治期には政府の殖産興業政策の一環として様々な勸業博覧会が頻繁に開催され、賑わった。明治十年（一八七七）に、現在の東京国立博物館前の噴水池のある広場を会場にして開催された第一回内国勸業博覧会には、全国から集められた美術工芸品、物産品など八万点以上が「美術館」、「農業館」、「機械館」などに陳列され、五か月で四十五万人の人が訪れたと

いう。以後博覧会は度々開催され、上野公園は大勢の人々が訪れる場所となった。

美術展覧会も早くから上野公園の各所で開かれていたが、明治四十年（一九〇七）の文部省主催美術展覧会（文展）の開催は、上野の山と美術展覧会を結びつける大きな出来事であった。東京勸業博覧会後の建物を会場として産声をあげた文展は、その後も「竹の台陳列館」と呼ばれたこの会場で開催された。大正十五年（一九二六）の東京府美術館の開設まで、恒久的な形では上野の山には美術館はなかったのである。

このようとき、大正十年（一九二一）に九州の実業家佐藤慶太郎氏は百万円を美術館建設資金として東京府に寄贈し、東京府美術館は創設された。佐藤

慶太郎氏はまさに現在の東京都美術館の生みの親なのである。

東京府美術館は、ギリシャ神殿を思わせる重厚感のある建物であり、主に公募団体展の会場として使われ、日本の現代美術の中心的な拠点として多くの優れた作家を輩出してきた。その半世紀にわたる歴史と伝統をもつ美術館も、昭和五十年（一九七五）、東京都美術館新館の開館によってその役目を終えた。新しい東京都美術館は、公募展事業のほか、本格的な美術館としての機能をもち、自主企画展や大型海外展などを積極的に開催し、公募展と合わせて年間三百万人もの来館者を数えたこともあった。しかし、三十五年の歳月による施設の老朽化は如何ともしがたく、設備の更新、美術館としての機能の向上のために改修工事に踏み切った。建物の基本的な構造はそのままに、内部を一新し、利便性、快適性を向上させた。公園の自然との調和を図りながら、北側にも出入口を設けるなど、館へのアプローチを易くしたことは今回の改修の特徴の一つである。

美術の殿堂へ 新たなスタート

新生・東京都美術館は、「アートへの入口」として、すべての人を迎え入れ、新しい価値観に触れ、「創造と共生の場」を築き、「生きる糧としてのアート」に出会える場とし、「心

のゆたかさの拠り所」となることをめざすことを使命（ミッション）としている。従来からの公募展に加え、公募展活性化のための団体選抜展や、館独自の企画展、新聞社等との共催展を開催する。リニューアル後の最初の海外展となる、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」などの名品で構成された「マウリッツハイス美術館展」（六月三十日―九月十七日）は、大いに人々の関心と呼ぶものと思われる。新しい事業として注目されるのが、アート・コミュニケーション事業である。美術館をアートと人、人と人、人と場所をつなぎ、交流の場とするため、双方向性を重視した鑑賞会、ワークショップ等のコミュニケーション事業を展開する。東京藝術大学と連携して、この事業を推進する人材、アート・コミュニケーションの養成もすでに始まっている。さらに、美術館にはアメニティ（快適さ）が求められており、そのためにレストラン、ミュージアムショップ、美術情報室、「佐藤慶太郎記念アートルーング」を館の方針のもとに運営し、来館者へのサービスを充実させる。上野公園とともに歩んできた東京都美術館は、今後東京の文化発信の拠点として、歴史と伝統を踏まえ、新しい価値の発見と創造をめざして、独自の事業を多様に展開していくことになる。

筆者略歴

一九三七年香川県生まれ。六十二年東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。群馬県立近代美術館学芸員、東京都美術館事業課長などを経て、現職。

高田松原の「流木のヴァイオリン」を 千人がリレー演奏

大津波によって消滅した高田松原。
流木と化した松の木は匠の手により蘇る。

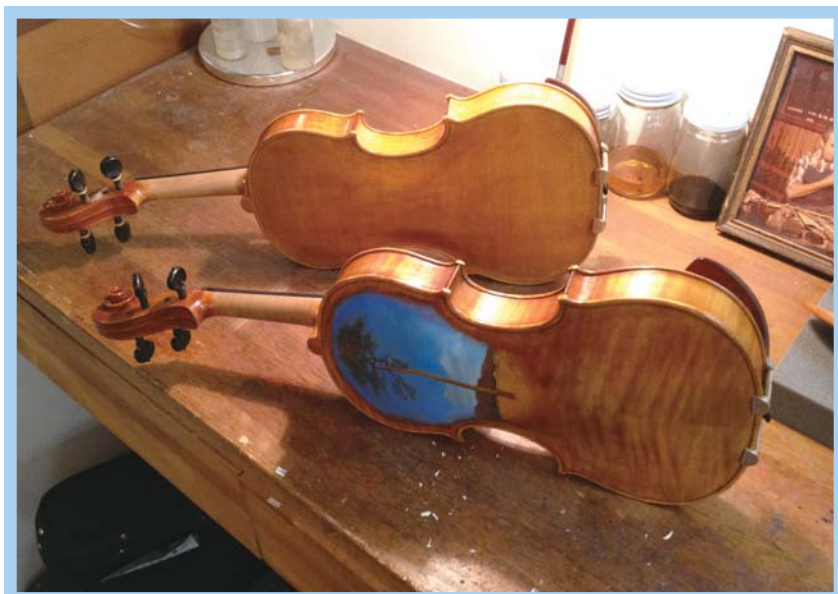
ヴァイオリンにこめられた新たな生命

私は長年、弦楽器の制作やストラディヴァリウスなどの名器の修復の仕事に携わっております。震災直後、想像を絶する惨状が刻々とテレビに映し出されていく中に、泥に埋もれた一台のピアノがありました。きつと音楽が好きで誰かが大切にしていた数多くのヴァイオリンも津波で流されてしまっただろうと、胸が締め付けられる思いがしました。

それからというもの、弦楽器製作者として、音楽に関わる一人として、何か被災地の方たちのお役に立てることはないかと模索しておりました。そんなあるとき、「奇跡の一本松」を残してすべて流され、瓦礫の山だけがうず高く積み残されている高田松原の風景をニュースで目にし、瓦礫と化した流木からヴァイオリンを作ることができないかと思いついたのです。

昨秋、岩手県の陸前高田市を訪れたとき、震災から半年経ても無残なままの街の姿に呆然と立ち尽くしながら、この地に住んでいた人たちの失われた暮らしに思いを馳せました。震災前は家の床柱や梁に使われ、被災地で暮らす人々の思い出が刻まれた木、七万本の松が立ち並ぶ景勝地として人々の故郷の風景であった木……。その木をヴァイオリンとして蘇らせ、ヴァイオリンリストからヴァイオリンリストへと永きにわたって弾き継がれることで、被災した方々を

励まし、この震災の体験が風化しないような支援ができたなら……。そんな思いが募り、「流木のヴァイオリン」を作る決意を固めました。



中澤氏によって制作された2挺の「流木のヴァイオリン」。表板は高田松原の松を、裏板は岩手県のカエデが使われた。友人の画家が一本松の絵を描いた。

十二月に再び陸前高田市と岩手県大船渡市へ向かい、地元の人たちや製材所の協力を得て、山積みになっていた瓦礫の中から弦楽器に使えそうな流木を集めました。表側の板には高田松原の松を、裏板は別の土地の岩手のカエデを選んで東京の工房に戻り、震災一年となる三月十一日までの完成を目指して、寝る間を惜しんで制作に没頭しました。通常、プロの演奏家のためのヴァイオリンはヨーロッパのバルカン半島の木材をよく乾かして使います。日本の木はバルカンのものと比べて想像以上に堅く、扱いにくいものでした。共鳴音が優しい音色になるように、十分の一ミリ単位で薄く削っていく過程で、岩手と東京の気温差で板にひびが入ってしまったこともあり、何度も試行錯誤しながら作りあげていきました。

永遠に伝えたい鎮魂の調べ

「流木のヴァイオリン」の企画は、NPO法人陸前高田市支援連絡協議会や親交のある演奏家の方々をはじめとする多くの人たちの賛同を得て、「千の音色でつなぐ絆」プロジェクトと命名されました。千人のヴァイオリンリストがリレーのように「流木のヴァイオリンを「人と人を結ぶ絆」のシンボルとして受け継ぎながら、千の計画も練っているところです。

被災地で成長した子供たちが、この楽器を演奏するようになった時点で、このプロジェクトを一区切りとする予定です。それまでには、楽器に千人の演奏家の音色が弾き込まれ、楽器自体が歴史を刻んで成長していくような長い時間を要します。演奏家の手から手へ、この楽器が弾き継がれていくにつれ、被災地の復興が進んでいくことを願ってやみません。この「流木のヴァイオリン」がストラディヴァリウスのように時空を超え、絆でつながった世界中の演奏家の方々によって癒しの音色を奏で、一人でも多くの皆さまの心に希望の光を灯すことが私の願いです。

筆者略歴

一九四〇年兵庫県生まれ。ヴァイオリニストクワイ。東京、長野、イタリアに工房を持ち、ストラディヴァリウスなどの名器の修復や鑑定、イスラエル・フィル、ベルリン・フィルをはじめとする一流演奏家の楽器の調整を手掛ける。著書に「ストラディヴァリウスの真実と嘘」（世界文化社）。妻はヴァイオリンリストの中澤さみ子。

*現在このプロジェクトに賛同して、ご協力をしてくださる方の参加を募集しております。
詳しくは左記宛ご連絡ください。

【お問合わせ】

ヴァイオリン・プロジェクト「千の音色でつなぐ絆」
命をつなぐ木魂（こだま）の会
090-2679-3809 事務局 大庭
Facebook <http://onfame/zBu19x>
ホームページ <http://www.sennoneiro.com/>
Eメール violinproject@hotmail.co.jp



2012年3月11日、「奇跡の1本松」の前で、被災松で作ったヴァイオリンを演奏するイヴリー・ギトリス氏。(©ペルナール・モラレス)

音色で心を癒す音楽を奏でていくというものです。日本の伝統には、ご存知のように心の底から願いを叶えたいときに折られる千羽鶴の慣習があります。また、千手観音の千本の手は、どのような衆生をも漏らさず救済しようとする、観音の慈悲と力の広大さを表すといえます。千年に一度の大震災ともいわれましたが、千という数字を、被災地で亡くなられた方々へ向けた無数の鎮魂の祈り、被災された方々の無数の希望として託しました。

完成したヴァイオリンは、裏板に友人の画家の手によって「奇跡の一本松」が描かれ、三月十一日に陸前高田市での追悼式で鎮魂の調べを奏でることになりました。弾き初めをしてくださったのは、現役最高齢の著名なイスラエル人ヴァイオリンリスト、イヴリー・ギトリスさん（八十九歳）です。ユネスコ親善大使でもあるギトリスさんは昨年、被災地で演奏会を開いており、この追悼式で献奏するためにバリから駆けつけてくださったのです。

ギトリスさんが音魂を入れた「流木のヴァイオリン」は、今後、長年をかけて音楽のジャンルを超え

希望の調べは希望の光となり、 時空を越えて

てプロの音楽家、あるいはアマチュアの演奏家によって、それぞれの癒しの音色を奏でていくでしょう。今回のプロジェクトのために、被災地の流木を使ったもう一挺のヴァイオリンを完成させており、この一挺は海外の演奏家の方たちにリレーされていきます。また、二〇一三年にはヴィオラ一挺、一四年にはチェロ一挺を制作する予定です。

被災地で生まれ育った木で作られた弦楽器は、被災地での慰問コンサート、演奏家の方々が開く日本各地でのコンサートで弾かれ、そして海外も旅しながら絆の輪を広げていくこととなります。すでにフランスの世界的なヴァイオリンリスト、ジェラルド・ブルーさん、東京芸術大学教授のヴァイオリンリスト、澤和樹さん、ピアノリストの黒沼ユリ子さん、元仙台フィルハーモニー管弦楽団コンサートマスターの伝田正秀さん、ヴァイオリンリストの宮本笑里さん、長野

一般財団法人
日本ヴァイオリン文化芸術振興財団
代表理事
中澤 宗幸
(なかざわ むねゆき)



高松塚古墳壁画の今

― 壁画発見四十年をむかえて ―

多くの人々を魅了した「飛鳥美人」とよばれる女子群像。被葬者は誰か？

発見から四十年、高松塚古墳壁画をめぐる謎と興味は尽きない。その現状をレポートする。

壁画は古代のロマンを秘めたタイムカプセル

高松塚古墳壁画は、一九七二年三月二十一日に発見されました。したがって、今年はその四十周年の



石室取り出し直前の飛鳥美人「2006年」(写真1) 奈良文化財研究所撮影

記念の年となります。ここではわが国の文化財保護の象徴的存在ともいえる高松塚古墳壁画の四十年を概観し、現状をご報告いたします。

高松塚古墳は、奈良県高市郡明日香村大字平田字高松に所在する小形の円墳です。壁画は一九七二年三月、明日香村を事業主体として奈良県立橿原考古学研究所が実施した発掘調査により発見されました。この発見は、当時の古代史学、考古学、美術史学における「世紀の大発見」として大々的に報じられ、現在まで続く古代史・考古学ブームの火付け役となりました。

高松塚古墳壁画は、十六枚の凝灰岩製切石が組み合わされた石室(内法は、横幅百三十三・高さ百十三・奥行に百六十五)の内面全体に漆喰を塗り描かれたものです。ヨロップパ等の壁画に一般的な漆喰



壁画石室の取り出し(写真2) 文化庁撮影

が生乾きの間に色料を塗布するフレスコ(fresco 湿式法)の技法ではなく、乾いた漆喰の上に色料を塗布するセッコ(fresco secco 乾式法)の技法で描かれたと考えられています。

天井には星宿図(天文図)、東壁には男子群像・青龍・日像・女子群像、西壁には男子群像・白虎・月像・女子群像、北壁には玄武が描かれました。このうち西壁女子群像は「飛鳥美人」とよばれ、飛鳥時代の文化の象徴のごとく国民に親しまれていることは周知のことと思います(写真1)。なお、南壁には朱



文化庁古墳壁画対策調査官
建石 徹
(たていし とく)

雀が描かれていた可能性が高いですが、盗掘の影響によるのでしょうか、南壁は漆喰の大半が失われており、その痕跡は認められません。

高松塚古墳は、壁画発見の翌月に文化庁に管理が委ねられ、その後、現在まで文化庁が管理をおこなっています。一九七三年、古墳は特別史跡に、また一九七四年、壁画は国宝、出土遺物は重要文化財に指定されました。さまざまな分野の有識者による検討を経て、壁画は現地で保存されることになりました。

壁画を保存するための努力

壁画発見当時、そのきわめて高い価値を考慮し、文化庁においてもさまざまな形で現状の記録をおこなっていました。それは写真によるもの(高松塚古墳総合学術調査会『高松塚古墳壁画』、作品記述によるもの(同調査会『高松塚古墳壁画調査報告書』、模



顕微鏡を用いた修理(写真3) 文化庁撮影



修理作業室の一般公開(写真4) 文化庁撮影

写によるものです。摸写は、前田青邨の総監修のもと、平山郁夫、今井珠泉、月岡栄貴、守屋多々志、蓮尾辰雄、近藤千尋、若林卓の当時の日本画壇の第一線で活躍中の各氏が制作にあたられました。この模写は現在、国立文化財機構奈良文化財研究所飛鳥資料館において保存活用されています(注)。これから発見時の記録は、その後の壁画の劣化(後述)を鑑みれば、実物に匹敵する重要な価値を有していることは言うまでもありません。

壁画の現地保存の方針にしたがい、文化庁では三十数年間にわたり、古墳の南側にコンクリート製の「保存施設」を設けて壁画の現地保存をおこなってきました。詳細は二〇一〇年の高松塚古墳壁画劣化原因調査検討会による報告書(同検討会『高松塚古墳壁画劣化原因調査報告書』)にゆづりますが、三十数年間の壁画の現地保存の歴史の中で、大きく二度、壁画の劣化が急激に進んだ時期がありました。一度目は一九八〇年から一九八四年頃で、この時期に壁面にカビが大発生し、白虎の描線が退色しまし

た。二度目は二〇〇一年から二〇〇五年頃で、この時期に再び壁面にカビが大発生し、西壁女子群像をはじめとする図像の上に黒いカビが発生し、これにより二〇〇五年六月、壁画を石室ごと古墳の外に取り出して修理することを決定しました。二年ほどの準備期間を経て、実際の取り出し作業は二〇〇七年四月から八月におこないました(写真2)。

壁画の今後

現在、古墳にほど近い国営飛鳥歴史公園内に設置した国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設において、壁画と石室石材の修理作業を実施中です(写真3)。壁画の修理の大半はクリーニング作業で、次亜塩素酸ナトリウム水溶液等を用いながら、壁面の状況に応じた処置を実施しています。漆喰層の強化については、ふのり(生物対策として不純物を精製して使用)やセロロース誘導体等を用いた処置を進めています。壁画・石室石材の修理には、およそ十年がかかる見込みです。

壁画・石室石材は当面の間修理中であるため、二〇〇八年から年に一、二回の頻度で国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設の修理作業室を一般公開しています(毎回八日程度、写真4)。今年度も下半期に一般公開をおこなうことを計画しております(日程の詳細は未定。文化庁HP等を通じて公表いたします)。ぜひ現地に足をお運びいただき、壁画の現状や修理の進み具合等を実際にご覧いただくとともに、明日香村周辺の魅力ある文化財・風土にいえへの思いをさせていただければ幸いです。

(本文中の敬称は省略させていただきます)

注…文化庁以外の機関により制作された模写として、飛鳥保存財団(守屋多々志他)によるもの、愛知県立芸術大学(片岡球子、吉田善彦他)によるもの、東京芸術大学(寺田春式他)によるもの等があります。

京極フアンドへの期待

一九九四年、「姑獲鳥の夏」によって衝撃的な作家デビューをはたした京極夏彦氏。当代一の人気作家から寄せられた東日本大震災の被災文化財救済の支援の声を紹介。



記者会見にのぞむ京極夏彦先生と宮田亮平理事長

昨年五月、講談社の文芸局の方から、作家の京極夏彦先生が企画が進行中の電子書籍化される「百鬼夜行」シリーズの配信収入の一部を東日本大震災の被災文化財レスキュー事業に寄付したいと、おっしゃっているが、いかがなものでしょうか。といった申し出を受けました。もちろん、財団としては異存があるはずがなく、基本的には話は即、合意しました。京極先生としては、作家として紙とは縁の深い関係にあるのだから、寄付金は紙の被災文化財の修復・保存のための救済に使ってほしい、という希望があり、これが唯一の条件でした。

津波によって水没した古文書類を修復する道程には困難の多い作業が待ち受けています。被災地では、歴史の証人とも言うべき多くの石碑が津波によって流失。水損したものの、残された拓本は今や貴重な資料となっています。陸前高田市に残されていた「吉田家文書」に代表される古文書類と共に残された多くの紙の文化財が修復の順番を待っています。

京極先生としては、一過性ではない、継続的な支援活動としたい、との考えがあり、これを「京極フアンド」と位置づけられました。

また、協力関係にある講談社も「電子」が生み出したお金を「紙」の救援に役立てることで、紙の書籍と電子の書籍が共存共栄するというメッセージを出版界から次世代に向けて発信したいとの意向が示されました。

諸般の準備が整い、本年三月三十日に東京芸

財団専務理事
小宮 浩
(こみや ひろ)

術大学の赤レンガ一号館で、京極先生と当財団の宮田理事長が共同記者会見をひらき、京極フアンドの趣旨を披露しました。和服姿の京極先生、会場となった明治十三年（一八八〇）に竣工の赤レンガ館は京極ワールドを偲ばせるようで記者会見は大いに盛り上がった次第です。最後になりましたが、京極先生のコメントを御紹介しましょう。

* * *

この度の災厄で、多くの過去・現在・未来が損なわれてしまいました。失われたものを取り戻すことは難しいでしょう。ただ、未来はこれから創り出すものです。より良い未来を創るためにはまず現在を生きなければなりません。従って、今を生きるための手だてを施すことが最優先事項であることは疑い得ない事実でしょう。一方で、現在の生が過去の生の積み重ねの上に乘っているということも、忘れてはいけな

第4回

文化事業への貢献

世界には様々な国があり、様々な民族がくらしています。そこには様々な文化が存在します。

優れた文化は国家、民族の誇りです。

文化を育てあげることが、世界に日本の存在を発信する大きな力になるでしょう。

こうした見地から御支援いただいている

法人会員の皆様に

文化への取り組みをうかがいました。

コミュニケーション力の向上をめざして……。

電通は、「コミュニケーションの力で世の中を今よりちょっと幸せに」を目指して、社会貢献活動を行っています。その中でも、ユニークな活動として多くの方から評価をいただいているのが「広告小学校」プロジェクトです。

生きていく上で誰しもが、あらゆる場面で必要となるコミュニケーションの力。それは、その人が元々持っている以上に、育てられるものであることを、私たちはこのプロジェクトを通じて実感しています。

「広告小学校」は、学校に無償で提供している授業プログラムで、出張授業ではなく、日常的に子どもに接している学校の先生が授業の中で行



うものです。電通のコンテンツ制作チームと学校の先生が約三年掛けて開発した教材は、鼻と口がCMになっているキャラクター「コマ犬」がCM劇づくりのナビゲーターとなるなど、子どもたちが楽しく自発的に授業に参加できるよう工夫を凝らしています。「入門CM」「自分探検CM」「公共CM」の三つのユニット構成で、段階を踏んで学べるのも特長です。

これまで全国八十九の学校で実施され、約八千四百人の子どもたちが体験。教育の場でも、コミュニケーション力の重要性への認識が高まる中、小学校だけではなく、中・高校でも取り入れられるようになり、毎年継続して実施する学校が増えてきました。先生からは、このプログラムを通じて、子どもたちの新しい一面や可能性に気付いたという声が数多く寄せられています。

詳細は、電通ホームページ内専用サイト

(<http://www.dentsu.co.jp/ko-mainu/>) をご覧下さい。



中村 優子 | なかむら ゆうこ | (株)電通 総務局社会貢献・環境推進部 専任部長

是枝 周樹

これだ ひろき | 株式会社ミロク情報サービス 代表取締役社長



日本の美しい世界遺産のさまざまな表情を紹介し、お客様から大変好評を得ました。

人を愛し、文化を育み、豊かな社会づくりをめざす

株式会社ミロク情報サービス(以下、MJS)は、創業以来、「豊かな生活の実現」「社会的人格の錬成」、そして「文化活動への参加」という三つの企業理念を掲げています。「文化活動への参加」には、人を大切にし、文化の香りがする独自の企業を目指したいという想いが込められています。企業理念に基づく事業活動を通して、お客様や社会へ貢献することはもちろん、全てのステークホルダーから広く愛される会社づくりを目指しています。現在、CSR活動の一環として、次のような社会・文化活動に取り組んでいます。

①公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団様への支援：MJSは毎年、お客様への感謝の意を込めてお配りするオリジナルカレンダーを企画・制作しています。昨年は、MJSが賛助会員になっている公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団様の監修の下、次の世代へつなごう、かけがえのない日本の美をテーマに、

②東京国立博物館様への賛助：東京国立博物館が行う文化財の収集・保管・展示、その基盤となる調査研究や教育普及活動などについて、支援・支持しています。MJSは、お客様向けの広報誌やグループ報にて東京国立博物館が企画する特別展を紹介し、お客様やMJS社員およびその家族を無料ご招待することで、多くの方が珠玉の芸術に触れる機会を創出し、日本文化への理解促進の一助を担いたいと考えています。

今後も、MJSは企業理念に基づき、CSR活動の一環として社会・文化活動に継続的に取り組んでまいります。

※ corporate social responsibility (企業の社会的責任)

定款第4条の定めに従い、次の事業を行った。

平成二十三年度事業報告

■文化財保存修復助成事業

※美術工芸品等の保存修復に対する助成

- ①宮城県・成覚寺
清海曼荼羅図の修理
- ②東京都・五社神社
木造蔵王権現立像、不動明王立像の保存修理
- ③東京都・増上寺
木造四天王像の保存修理
- ④石川県・印鑰神社
絹本着色印鑰明神垂迹図の保存修理
- ⑤静岡県・中野観音堂
木造十一面観音立像、木造菩薩立像の保存修理
- ⑥高知県・安芸市
五藤家文書の保存修理
- ⑦熊本県・東福寺
木造千手観音立像の保存修理
- ※建造物の保存修復に対する助成
- ①茨城県・小山寺
仁王門の半解体修理
- ②千葉県・薬王院
薬師堂の保存修理
- ③山梨県・鈴木五郎
宝鏡寺薬師堂の保存修理
- ④三重県・龍泉寺
三門の保存修理
- ⑤滋賀県・聖衆来迎寺
表門の保存修理
- ⑥奈良県・弥勒寺
木造弥勒如来坐像1軀御堂の修理
- ⑦大分県・教尊寺

経蔵・輪蔵の保存修理

※能登半島地震被災文化財の復興支援

- ①石川県・明泉寺
木造千手観音立像の保存修理

■芸術研究等助成事業

- ①鎌倉時代造像銘記の調査と資料収集
(東京芸術大学名誉教授 水野敬三郎)
- ②桃山文化期における建造物時絵塗装の保存修復科学的研究
(東京文化財研究所伝統技術研究室長 北野信彦)
- ③東京芸術大学美術学部彫刻科企画展「彫刻の時間―継承と展開―」
(東京芸術大学美術学部教授 深井 隆)
- ④二〇一一年日独交流百五十周年記念コンサート
(東京芸術大学音楽学部教授 澤 和樹)
- ⑤文化財保存修復専門家養成実践セミナーの開催
(NPO法人文化財保存支援機構 副理事長 西浦忠輝)
- ⑥国際陶芸シンポジウム2011 in Japan
(東京芸術大学美術学部教授 島田文雄)
- ⑦歴史的建造物の保存に関する国際シンポジウムの開催
(名古屋市立大学芸術工学研究科 教授 青木孝義)
- ⑧キジル石窟壁画の絵画技術研究と保存技術に関する共同研究
(筑波大学人文社会科学研究科助教 谷口陽子)

■国際協力事業

- ①一九九八年十二月十日付けで合意された、人材育成等の援助計画に関する覚書に基づき、敦煌研究院より研究員二名の招致助成
(張 景峰、李 波)
- ②ウズベキスタンにおける文化遺産保存修

復技術実技研修

(駒澤大学非常勤講師 古庄浩明)

- ③タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画の保存修復
(タジキスタン国立古代博物館長 サイドムロド・ボボムロエフ)

- ④テル・タバン遺跡出土粘土板文書の保存処置
(筑波大学人文社会科学研究科助教 柴田大輔)

- ⑤中央アジアにおける博物館収蔵考古資料の再整理
(奈良文化財研究所文化財情報研究 室長 森本 晋)

- ⑥古代墳墓の発掘保護に関する日中共同研究
(東京文化財研究所保存修復科学センター 副センター長 岡田 健)

- ⑦アンコール遺跡群西トップ遺跡建築装飾部の修復・復元
(奈良文化財研究所 国際遺跡研究室長 杉山 洋)

- *外国人研修員招聘
(中国 呼和浩特博物館蒙古壁画 保護中心非常勤職員)

- 重点助成事業
- ※尼門跡寺院文化財保存修復助成事業

- ①三時知恩寺蔵「二階厨子棚」の保存修理
- ※東日本大震災被災文化財救援・復旧支援事業

- ①東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業
- (東北地方太平洋沖地震被災文化財等 救援委員会)

- ②天心・六角堂復興プロジェクト
(茨城大学)

■文化財の保護及び芸術振興に関する出版物の刊行、講演会の開催、その他普及及び広報活動に関連した事業

*広報誌「絲綢之路」の発行

- 第66号(二〇一一年夏)平成23年6月24日発行
- 第67号(二〇一一年秋)平成23年10月14日発行
- 第68号(二〇一二年春)平成24年1月25日発行
- 配布先：都道府県教育委員会、美術館・博物館、文化財研究機関、芸術系大学、新聞社、支援者、賛助会員、理事・評議員 その他関係者

*文化財保存修復支援力レンダー基金の募金活動

- 募集期間：平成23年11月～平成24年1月
- 制作題材：徳川美術館所蔵「源氏物語絵巻」現状模写

- 募金応募件数：2,543件
- (募金額9,038,166円)

- *日中韓文化交流フォーラムの開催
- 会期：平成23年9月20日～23日
- 会場：韓国・慶尚北道慶州市

- *「妙高夏の芸術学校」の共催
- 主催：妙高夏の芸術学校実行委員会
- 共催：公財文化財保護・芸術研究助成財団、新潟日報社

- 期間：平成23年7月28日～31日
- *第6回「文化財保存・修復―読売あおによし賞」を後援

- 主催：読売新聞社
- *「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」を後援

- 主催：NPO法人文化財保存支援機構
- *国際シンポジウム「文化遺産を危機から救え」緊急保存の現場から」を後援

- 主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁、外務省
- *「美の継承展」を後援

主催・・・ライザコーポレーション
*「文化人・芸能人の多才な美術展」を後援
主催・・・文化人・芸能人の多才な美術展実行委員会
※国際シンポジウム「建築遺産の保存・研究と応用」を後援
主催・・・名古屋市立大学芸術工学研究科附属環境デザイン研究所
※日本建築学会東海支部シンポジウムを後援
主催・・・日本建築学会東海支部
※第61回社会を明るくする運動を後援
主催・・・第61回社会を明るくする運動中央推進委員会
※アフガニスタン流出仏教壁画片修復展を後援
主催・・・東京芸術大学文化財保存学保存修復油画研究室
※国宝「源氏物語絵巻」に挑む 東京芸術大学現状模写展を後援
主催・・・東京芸術大学、東京新聞
※区長賞創設三十周年 台東区コレクション展に協力
主催・・・台東区

二十三年度ご支援いただきました法人賛助会員の皆様

法人正会員(三十五社)

【五十音順】

- アイテック 株式会社
- 朝日生命保険 相互会社
- 株式会社 NHKエンタープライズ
- 株式会社 NHK出版
- 株式会社 NKB
- 鹿島建設 株式会社
- 加茂鶴酒造 株式会社
- 関西電力 株式会社

法人維持会員(九社)

【五十音順】

- アサヒグループホールディングス 株式会社
- 大阪ガス 株式会社
- 公益財団法人 五井平和財団
- 宗教法人 全昌院
- 大和建設 株式会社
- 千代田絨毯 株式会社
- 株式会社 なとり
- 公益財団法人 東日本鉄道文化財団

キリンホールディングス 株式会社

- 株式会社 講談社
- 株式会社 資生堂
- 株式会社 集英社
- 株式会社 精養軒
- セコム 株式会社
- 全日本空輸 株式会社
- 株式会社 高島屋
- 武田薬品工業 株式会社
- 株式会社 竹中工務店
- 株式会社 電通
- 東京ガス 株式会社
- 東京書籍 株式会社
- 株式会社 東京ドーム
- 株式会社 東京マルイ美術玩具自動車 株式会社
- トヨタ自動車 株式会社
- 日本写真印刷 株式会社
- 日本たばこ産業 株式会社
- 野村ホールディングス 株式会社
- 株式会社 日立製作所
- 有限会社 丸栄堂
- 三井住友海上火災保険 株式会社
- 株式会社 三井住友銀行
- 三井物産 株式会社
- 株式会社 三越伊勢丹
- 株式会社 ミロク情報サービス
- 森ビル 株式会社

株式会社 横井春風洞

